

# 國學院大學學術情報リポジトリ

祭りにおけるモノと心の関係性：  
日牟禮八幡宮左義長祭にみる祭り要素と「意味」

|       |                                                                                                        |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 島田, 潔<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00001937">https://doi.org/10.57529/00001937</a>                      |

# 祭りにおけるモノと心の関係性

## ―日牟禮八幡宮左義長祭にみる祭り要素と「意味」―

島田 潔

### 要旨

本稿は、滋賀県近江八幡市日牟禮八幡宮の左義長祭を事例に、祭り要素とそれに対する当事者の意味付けとの関係から、祭りにおけるモノと心の関係の一端を明らかにすることを目的として行われた。左義長祭は、本来民俗行事だが、一九世紀後半に若衆の活動により急激に祭礼化した。この祭りには、厄除・火防という宗教的な「意味」のほかに、織田信長の安土起源説や近江商人の心意を表すなどの社会的な「意味」が、語られている。これらの「意味」を担う要素には中心的要素と従属的要素とがあり、それらはさらに歴史的に変化が見られない固定的要素と歴史的な展開の認められる可変的要素とに分かれるが、最も中心的な要素である左義長は、特定の「意味」を担わない。「意味」を担うのは従属的な要素で、そのうち固定的要素は普遍的で宗教的な「意味」、可変的要素は社会的「意味」を担う。ただ、人々の関心の焦点として発展した「だし」は、半ば固定的な要素になっており、宗教的・社会的双方の「意味」を担い始めている。

### キーワード

モノと心、祭り要素、意味付け、左義長祭

### はじめに

モノと心を祭り研究の中で考える時、相互に関連し合った二つの問題設定がありうる。モノと心は祭りといかに関わるのかという問題と、祭りの中でモノはいかに心と結びあうのかという問題である。そして前者には、祭りの中にどのようなモノがいかに用いられているかという問題と、人々の心は祭りの儀礼構成や儀礼内容といかに関わり合っているのかという問題との、二つの問いが含まれる。つまり、祭り研究の中でモノと心を考える際には、最低三つの問題に目配せしなければならないことになる。だが、これが意外と難しいのである。

これまで、祭り研究の中では、モノはシンボルとして把握されてきた。シ

ンボルに関しては、そこに祭りの世界観や何らかの観念を指し示す「意味」を見出す立場と、そのような「意味」を前提とすることと否定的な立場とがあるが、<sup>①</sup>どちらにしてもモノそのもののへの関心は希薄であった。なぜなら一番の関心は祭りの世界観や意味作用・機能を明らかにすることであり、個別のモノはそれらと関わり合う限りにおいて取り上げられるに過ぎないからである。それ故、祭りの有する何らかの「意味」や機能を前提に、モノと「意味」や機能を一对一で対応させる傾向が認められ、祭りの動態を捉えることが困難になるという問題も生じている。

これに対して、モノに重点を置く研究もある。例えば、近年の都市祭礼における山・鉦・屋台など曳き物の研究に進展をもたらした植木行宣氏の研究は、その代表的なものである。<sup>②</sup>植木氏の、「都市祭礼の実態を追い、物質文

化としての山・鉾・屋台の諸相とその歴史の変遷を具体的に明らかにすること。研究を進めるためにはその取り組みが不可欠である」(『山・鉾・屋台の祭り』白水社、二〇〇一年、一八頁)という主張は、従来の研究とは逆に、モノの実態から出発することで祭りの動態を把握するという立場を示したものである。これは、祭りにおけるモノを特定の「意味」や機能から解放し、いわば原点に立ち返ってモノの実態を第一に重視することで祭りを捉え直すとするもので、モノを祭り研究の主要対象と位置付けるという意義がある。だが、ここにも問題が無いわけではない。それは、モノそれ自体の歴史的展開を重視するあまりに、モノの「意味」への関心が希薄になるという問題である。

ア prioriに「意味」を前提してモノを見ることには、もちろん問題が多い。だが、それでは祭りやその要素に何らの「意味」もないのかといえば、それは違う。なぜなら、多くの場合、祭りやその要素に対して、祭り当事者は何らかの意味付けを行っているからである。それは、人々の祭りに対する「心」の表れなのである。

だが、祭りは、常日頃からの一人ひとりの内面的な信仰心によって成り立つ文化ではない。祭りに表出する「心」があるとすれば、それは祭りの場で共有された社会的意識である。祭りに世界観を見出そうとするのも、そのような考え方がベースにあるからなのだが、世界観と呼ばれるものが人々に意識されていることは殆どない。人々が意識しているのは、多くの場合、断片的な意味付けである。しかし、断片的でも共有された意味付けがある以上、それを受け止めることこそが重要と考える。もちろん、そのような意味付けは時々の状況次第で変化し得る。だが、だからこそ、祭りを社会の動態に位置付けて理解することができるようになるのである。<sup>(3)</sup>

本稿は、このような観点から、滋賀県近江八幡市に鎮座する日牟禮八幡宮の左義長祭を事例として、祭りを構成するモノや儀礼要素の実態と歴史的展開、それら要素と祭り当事者の意味付けがどのように関係しているのかを把握

することを通して、祭りにおけるモノと心のあり方の一つのパターンを示すことを目的としている。

### 一 事例…日牟禮八幡宮左義長祭の構成と要素

日牟禮八幡宮左義長祭は、滋賀県近江八幡市宮内町に鎮座する日牟禮八幡宮の氏子のうち、旧八幡町地区が行なう祭りで、本来は一月一四・一五日だったものが、明治八(一八七五)年以降は毎年三月一四・一五日となり、昭和四〇年代から三月一四・一五日に近い土曜日・日曜日に行なわれている。

左義長と呼ばれる行事は全国各地で小正月の民俗行事として行なわれており、その歴史は平安時代の宮中にまでさかのぼることが知られている。木組みで三角錐や円錐形に作った骨組みを稲藁で覆い、その上に笹竹を立てて吉祥物や吉書を飾り付けたものを左義長と呼び、それを燃やして一年の除災招福や五穀豊穡などを祈るのが、多くの事例に共通する左義長行事の形であり、日牟禮八幡宮左義長祭も基本的には同様の形をとっている。

ただ、左義長祭の場合、神社祭礼として行なわれていることや、「赤紙」と呼ばれる赤い短冊形の紙を大量に飾り付けることや、左義長の形状が人の姿をかたどっていること、また食物を用いて作る「だし」「むし」と呼ばれる造り物を取り付けること、そして左義長を担ぎ回るといった点が、特徴的といえる。

まずは、平成二〇(二〇〇八)年三月一四日(金)から一六日(日)の観祭に基づいて、現状の祭りの概要を紹介したい。

#### ●祭り前日 三月一四日(金)

##### 祭り準備作業

・境内では、楼門に立てる赤紙の準備が午前中から行なわれている。楼門に

立てる赤紙は、長さ五メートル程の笹竹に無数に取り付けられる。赤紙は幅一〇センチメートル、長さ六〇センチメートル程で、厄除けと火防せのご利益があるといわれる。

・参加各地区では、左義長作りと左義長に飾る「だし」の最終調整、および取り付け作業が行なわれる。「だし」は、その年の干支にちなんだ図柄を食物で作るもので、その前面には同じく食品で作った「むし」と呼ばれる干支の動物を取り付ける。左義長が人の姿であるため、「だし」には決して人の形を作つてはいけない、とされている。

#### 〔御園祭〕 一三時〇〇分

一三時二五分 於神社拝殿

・三月一六日の左義長奉火の順番（一五日の渡御の順番でもある）を決めるくじを引く。

・祝詞奏上の後、拝殿に着座した参加町内の総神役が、正面の机上に置かれた番号の書き込まれた紙札を取つて宮司に見せる。宮司はそれを隣席の祭員に見せて、祭員が記録する。総神役とは、各地区で祭りを取り仕切る役員のことで、他に副総神役、警備神役、奉火神役がいる。

・くじ引きは、二回行なわれる。一回目は、三月一六日の午後八時に「一斉奉火」される五基を選ぶもので、一斉奉火を望む町内が参加する。二回目は、一回目のくじで外れた町内と一斉奉火を望まなかった町内が、六番目以降の順番を決めるくじ引きをする。

#### 【くじ引きの結果（巡行順＝奉火順）】

一番 第十一区「子供左義長あり」 八番 第一区



写真（左義長）

二番 宮内町 九番 為心町（いしんちょう）

三番 新町通り 十番 十区会

四番 魚屋町（うわいちょう） 十一番 本町

五番 紫竹会「子供左義長あり」 十二番 池田町

六番 第二区 十三番 参和会

七番 仲屋町（すわいちょう）

・御園祭終了後、各町の総神役が神輿庫から神輿を担ぎ出して拝殿に据える。旧八幡町には六六の町内があり、左義長祭への参加は全一三の区または通り単位で行われ、その中の有志が組織を編成して参加する地区もある。但し、一三地区全てが毎回参加するとは限らない。費用負担が少なくないため、年によって左義長を出さない地区もある。子供が担ぐ子供左義長を出す地区もあるが、近年その数は減り、今回を最後に暫くは出されないという話もある。

〔各地区左義長の清祓〕 一四時三〇分頃 於各町左義長宿

・日牟禮八幡宮宮司が、参加各地区の左義長を格納している「宿」（左義長宿）に出向き、左義長の清祓を行う。

#### ● 第一日 三月一五日（土）

〔左義長のお披露目・挨拶回り〕 一一時頃 於各町内および旧八幡町域  
・各地区の左義長が地区内でお披露目されるとともに、他地区への挨拶回りを行う。

・左義長の担ぎ手は若者が中心で、女装して紅白の鼻緒の「左義長下駄」を履き、「左義長拍子木」の音頭で担ぐのが伝統とされる。とはいえ、それも一〇年ほど前までのことで、最近では女装しての参加は少なくなつたという。だが、現在でも女装が散見され、ナースやセーラー服のコスプレで参加する若者もいる。なお、昭和四〇年頃までは、「左義長笠」と呼ばれる頭頂部が細く突き出た特異な形の笠をかぶっていたという。

〔渡御神幸祭・左義長だしコンクール審査〕 一三時三〇分 於神社本殿および境内

・一三時頃、左義長が神社境内の馬場に集合し、楼門に近い所から鳥居方向に一番く「三番の順に並ぶ。本殿前で役員が整列して神事を執行した後、「だしコンクール」審査が行なわれる。

・「だしコンクール」は、昭和二七（一九五二）年に始まり、今回で第五七回目を数える。審査結果は、渡御から帰還後に発表される。

〔渡御〕 一四時〇〇分 神社→旧八幡町域→神社

・号砲を合図に、渡御行列が神社を出発する。この時の左義長の順番は、御園祭で決まった順序の通りとなる。行列は、次のような構成となっており、神輿は出ない。

〔行列順〕 紋付二名―猿田彦面付きの御幣（白丁一名）―太鼓（白丁二名）

―宮司（騎馬）―左義長祭運営委員会名誉会長（近江八幡市長、陣羽織）―神社役員（袴四名）―赤紙（小学生一〇名）―左義長一五基（左

義長一三基と子供左義長二基が

抽籤順に巡行）

・この日、旧八幡町地区内の家々では、軒先に赤紙を飾っている。この赤紙は、翌日の奉火に際して左義長と共に燃やされる。

・一六時三〇分頃、一番左義長（二一区）と子供左義長が鳥居前に到着。一〇分間ほど「マッセ、マッセ」の掛け声に合わせて左右に回転して練った後、境内に入って楼門前まで進み、本殿に向いて練った後、馬場内所定の場所に着いた。その後も、



軒先の赤紙と左義長

一八時四〇分頃にかけて順番通りに左義長が到着するが、楼門前まで進んで本殿に向いて練ることをしない左義長もある。

〔だしコンクール審査結果発表〕 一八時四五分 於神社境内

・渡御前に行なわれた「だしコンクール」の審査結果が発表された。今年の各賞は次の通り。

優勝 為心町 近江八幡観光物産協会々々長賞 参和会

準優勝 宮内町 近江八幡商店街連盟会長賞 仲屋町

第三位 第十一区

・このうち十一区は、過去一二年間に八回も「だし」の審査で優勝しており、常に優勝を目指しているという。毎年一月二五日の町内新年会から準備を始め、上下の序列は重んじながらも若者の自主性に任せることで新しいアイデアを打ち出し、他町のダシを圧倒してきたという自負がある。今年の三位という結果は納得がいけないが、審査員に見る目がないだけで、見る人が見れば分かると信じている。

・「だし」作りは、各町とも新年会から若者を中心に行われる。かつては図柄のアイデアだけ考えて、製作は「だし」作りの職人に頼んでいたが、最近ではすべて自分たちで作るようになった。「だし」には各町の威信がかかっているため、他町に知られないように秘密裏にことを進め、趣向を凝らしたものを作るという。

〔各町の「だし」の展示〕 一九時〇〇分（予定） 於各町の左義長宿

・だしの審査結果発表の後、左義長は各地区に帰還する。帰還後、予定では、左義長から「だし」を取り外して左義長宿の外にライトアップ展示することになっているが、実際には、昼間の巡行で疲れており、帰還時刻も遅くなるため、行われないことが多いという。今回も、「だし」の展観は行われなかった。

●第二日目 三月一六日（日）

〔左義長大祭の神事〕 一〇時〇〇分―一〇時四九分 於神社本殿

・通常の神社祭式の他に、巫女二名による神楽の奉納がある。

・祝詞では、左義長祭が創始から四百十有余年の歴史ある祭り、で、連綿と「踊り」の姿を伝えており、国選択無形文化財・滋賀県指定無形文化財となっていることや、この祭りが商工業をはじめとする世の中の安寧・厄除け・開運を祈る祭りであることが述べられていた。祝詞に見られる「踊り」とは、左義長を担ぎ歩くことをいう。担ぎ手は「踊り子」と呼ばれ、若者がその役を担うが、若者が少ないため八幡町以外の町の若者を頼んで踊り子となつてもらう町内が多い。

#### 「左義長のケンカ」 一三時〇〇分～一六時〇〇分頃 於神社境内

・一三時頃から、各町では左義長の準備を行い、八幡町内を自由に動きながら神社境内に向け移動する。神社に勢揃いした後、一三時頃から約三時間にわたり、境内馬場で左義長同士をぶつけ合う「ケンカ」が行われる。本来、左義長のケンカは、碁盤の目状になつた町内の狭い道で行き会つた左義長が、どちらが先にその道に入つたかで争うものだった。だが、民家や商店に左義長が突つ込んで破損させることもしばしばで、その度に弁償しなければならず、その費用がばかにならなかつた。そこに、近年、警察から危険だから町内でのケンカはやめにしたかという勧めがあり、境内でのケンカという形に変わったという。

・ほぼ総当りのぶつけ合うが、だしコンクールで入賞した左義長を狙つてぶつけ合うことも多いという。また、伝統的にケンカが強い町内を避けてぶつけ合うケースもある。ぶつ



左義長のケンカ

け合いは、正面からぶつけてお互いに押し込む。横倒しになったり、空を仰ぐ形になったりすると負けともいうが、体制を立て直して押し合うケースも多い。お互いに組み合つて一進一退の状況になると、最後は総神役同士の協議でこの辺で終わりにしようと決めて、ぶつかり合いは終わる。

#### 「左義長奉火」(一斉奉火は二〇時頃、六番以降の奉火は二二時頃) 於神社境内

・ケンカを終えた左義長は、一旦各町内に帰還し、破損した「だし」や「むし」を修復するとともに、赤紙を新しいものに取り換える。修復後、再び神社境内に向けて、出発する。

・一八時頃、鳥居前で一番(十一区)左義長が「マッセマッセ」の掛け声とともに左右に回転して三〇分程練つた後に境内に入り、所定の位置に設置された。位置に着くと、担ぎ棒を外して奉火を待つ。一番の左義長に続いて、一〇～二〇分おきに奉火順に左義長が境内に集合してくる。

・二〇時頃、五番(紫竹会)の左義長が所定の位置に到着すると、一番から五番までの各地区総神役が拝殿前の篝火から採火して、自分の地区の左義長に一斉奉火をする。奉火の際には、左義長の頭部分の御幣に火をつけることとなっている。火がつけられると、若者たちが肩を組んで「燃やすな、燃やすな」と歌いながら、炎に包まれた左義長の周囲を踊り回る。左義長が燃え尽きると、総神役たちは拝殿で巫女神楽を奉納して帰る。

・二一時頃からは、五分～一〇分おきに六番以降の左義長への奉火が行われる。最後に奉火される左義長の



踊り回る若者たち

町内は、終了後に拝殿に出された神輿を神輿庫に収納する。

## 二 左義長祭の要素とその歴史的展開

### a 祭礼化と若衆の情熱

では、歴史的に、この祭りとその要素は、どのように展開してきたのだろうか。

左義長祭は、現在は神社祭礼となっているが、明治八（一八七五）年までは八幡町が日牟禮八幡宮の氏子とされなかったことから、神社と無関係な民俗行事として行われてきた（『火まつり調査報告書』一八頁）。『滋賀縣八幡町史・中巻』（昭和一五年刊。以下『八幡町史』と略す）によれば、寛文三（一六二六）年以前には既に行われていたが、必ずしも毎年行われるものではなかったとされるが（六五七〜六五九頁）、その歴史的実態はよく分らない。

左義長祭に関してある程度知ることのできる初見史料は、『八幡町史』所載の安永七（一七七八）年正月一日「左義長被仰渡并御請書」である。この史料によれば、この年、久しく中断していた左義長の執行を江戸表より許されており、この年の祭りが、その後の祭り形態の基本となったと考えられる。その記載から詳細を知ることができないが、神社祭礼ではなかったものの、左義長の「宮入」が行なわれており、協議によって決められた順番に従って運ばれた各町左義長が境内で燃やされる祭りだったことが分かる。この点で現在の祭りと共通しており、これが祭りの基本要素あることが理解される。ただ、当初の祭りは現在のような大規模な祭礼ではなかった。『近江八幡の火祭り行事―民俗文化財調査報告書』（近江八幡市教育委員会、平成一〇年刊。以後『近江の火祭り行事』と略す）所収の明治六（一八七三）年「左義長祭礼再興願書」に、祭りの歴史的変化について「全ク祭式等モ無之、御

布告ニ相見候從來因襲之神賑ト申ス体裁ニ候処、凡二百五十年來永統之義ヲ以諸方ニ名高ク□治稿山之外他ニ比類無之ニ付遂ニ祭礼之如ク相成來觀群集致シ土地繁昌陽氣發育之一助ニ候」と記されており、「因襲之神賑」程度のこじんまりとした行事であったのが、「諸方ニ名高」く「他ニ比類無」い行事であったことから、多くの観衆を集める「祭礼之如ク」なったとされる。この文書は、八幡町の日牟禮八幡宮の氏子化と左義長祭の神社祭礼化を求めて作成されたもので、必ずしも正確な歴史を伝えるものではないが、『近江名所図会』に全く左義長祭の記載がないことを考えれば、一九世紀前半までの左義長祭はごく小規模な行事であったことは確かであると考えられる。とすれば、一九世紀後半に、急速に「祭礼之如ク」なったということになる。この時代に、一体何があつたのだろうか。

ここに、祭りへの参加にエネルギーを注いだ若衆たちの動向を指摘することができ。

例えば、嘉永二（一八四九）年以降の為心町の左義長「だし」の図案などが記録されている「為心町左義長入用帳」（『近江八幡の火祭り行事』所収）には、嘉永五（一八五二）年と文久二（一八六二）年、慶応三（一八六七）年、それに明治五（一八七二）年に、町としては「休年」や諸物価高騰などで祭りには参加しないと決めていたにも関わらず、若衆が時に他町の動向も根拠にして、左義長祭への参加を強く要望したため、急ぎよ参加することになったことが記録されている。

このような、「休年」でも構わず、他町の動向にも敏感に反応して祭りへの参加を主導する若衆の存在が、祭りの盛大化の背景にあつたと考えられる。事実、左義長祭と若衆は、切っても切れない関係にあつたのである。その一端を示すのが、『日牟礼八幡宮火まつり調査報告書』（日牟礼八幡宮、昭和四一年刊。以後『火まつり報告書』と略す）所載の昭和二五（一九五〇）年の紫竹会の記録（二二頁）である。この記録によれば、この年、若衆（青年会）から「従前のごとく全町一致して奉納し、併せて左義長を通じて互いに親睦

を計り、一層盛大に左義長を奉納する趣旨の下に今年より各町内が中心になつて頂きたい」という申し出があり、これ以降各町内が中心となつて祭りを行なうようになったという。つまり、左義長祭は、歴史的に若衆が主導する祭りとして展開し、盛大化したのであった。

なお、「為心町左義長入用帳」の記録が嘉永二（一八四九）年から始まり、その翌年の嘉永三（一八五〇）年、初めて左義長祭を写した「左義長図」（『近江八幡の歴史・第三巻』所収）が描かれている。この頃に、祭りがそれ以前とは異なる様相を呈し始めた可能性が考えられる。

## b 左義長と「だし」

### 「左義長」

左義長祭で最も重要な要素は、祭りの名称にもなっている左義長であることとは言うまでもない。

その形態は特徴的で、心棒に三方から木材と竹で三角錐状に結びつけた骨組みを作り、その周囲に藁束を一二段（実際には七〜八段）に重ねた「十二段祝着」を飾り付けて松明を作る。この松明部分は「胴体」と呼ばれる。胴体の最上部は「喉」と呼ばれ、藁で作られた「耳」と呼ばれるアーチ状のものが三つ付けられ、御幣が挿される。「喉」の上には、杉の葉でドーナツ状に作った「頭」を乗せる。このようにして作られた「胴体」の上部には、前面に突き出した腕木が二本取り付けられており、ここに「だし」と呼ばれる造り物が飾られる。また、「胴体」の上部には、無数の短冊形の赤紙と「火打」「巾着」「くす玉」などの吉祥物や吉書の飾られた「一二月」と呼ばれる青竹が、取り付けられる。この「一二月」は「髪の毛」だとも言われている。現在では、必ずしもここに紹介した各部分の呼称が広く認識されているとは限らない状況があるが、完成した左義長の形は、「胴体」「喉」「耳」「頭」「髪の毛」をもち、人の姿に見立てられている。

このような左義長の形態がいつからあるのかは、残念ながら不明というほかない。ただ、嘉永三（一八五〇）年の「左義長図」には現在と同様の形の左義長が描かれており、少なくとも近世末以降は変化していないことが分かる。もともと、大きさは大正初年の電線架設によつて小さくなったと伝わっており、現在の左義長がかつての子供左義長の大きさだと言われている。

ところで、前出の安永七年の「左義長被仰渡并御請書」冒頭には、参加各町が左義長の大きさを「高サ逆藁迄 九尺、幅 七尺」とすると申し合わせたことが、記されている。「逆藁」とは、現在「十二段祝着」と呼ばれている藁束を重ねた松明部分を指すものと考えられ、要するに左義長本体部分の寸法が規定されたのである。だが、「安永年中左義長記」には、寸法を取り決めたにもかかわらず、中には「大クいたし候様子」が見られることを記し、それに対して八幡町の町民を代表し全町を取り仕切る立場にあつた惣年寄がわざわざ祭りの前に各町に向いて寸法の検分をしていたことが記されている。惣年寄まで登場して寸法の統一が図られたことは、これが単なる寸法の問題ではなかったことを示す。それは、寸法の違反が八幡町にとって許されない行為だったことを物語り、寸法の統一が八幡町としての統合に関わる重大事だったことが窺われる。

### 「だし」

それと対照的なのが、「だし」である。「だし」は、各地区が他地区への対抗心を燃やしつつ意匠を凝らして作るもので、昭和二七（一九五二）年以降はその出来映えを競い合うコンクールも開催されて、各地区の関心の焦点となつている。

だが、「だし」の歴史は不明で、初見は「為心町左義長入用帳」である。そして、それによれば、少なくとも明治四〇（一九〇七）年までは、干支にちなんだ図柄を食物のみで作るという現在の「だし」作りの決まりごととは存在しなかったことがわかる。また、昭和一五（一九四〇）年の『八幡町史』

にも、干支や時局関係の図柄を作るとは記されるものの、食物のみで作るという記述はない。それが、食物のみで作ると言われるようになったのは、昭和四〇年代以降のことと推察されるが、昭和四一（一九六六）年の『火まつり調査報告書』に、作り手が「主として乾物類を用いて細工する者ほど上手といわれる」（一四頁）と記されており、作り手の競争意識を背景にして食物使用が多くなり、現在のような「だし」が成立したものと考えられる。作り手も巻き込んだ各町内の対抗意識が、「だし」には注ぎ込まれてきたのである。

## 「額」から「だし」へ

ところで、「だし」は最初から「だし」とは呼ばれていなかった。その呼称が最初に見えるのは、「為心町左義長入用帳」の嘉永三（一八五〇）年の記事だが、そこには「額」と記されている。これは、形態に起因する呼称と考えられる。

「だし」という呼称が初めて見えるのは、「出シ」と記された文久二（一八六二）年のことで、これ以降は部分呼称としては「額」が用いられているものの、造り物全体を指す場合には「出シ」または「ダシ」という呼称が用いられている。「出シ」とは、左義長本体から前面に突き出ていることによる呼称と考えられ、形態を表す「額」とはカテゴリーの異なる呼称である。たとえば、当該史料の慶応三（一八六七）年の記事に、物価高騰などの影響で「出シ」を作らないという町の方針に対して、他の町でも「仮初之額」を出すからと若衆が再考を求めたところのように、「額」は「だし」よりも簡略なものとして認識されていたことが分かる。つまり、「額」から「だし」への呼称変化は、その状態が「額」という概念に収まりきらなくなっていたことを物語るものである。

そして、「だし」を出すことを求めたのが若衆であったことは、「だし」と若衆との一方ならぬ関係を示している。事実、嘉永三年と文久二年の記事に

は、左義長本体は各町の負担で作り、「だし」は若衆の負担で作るといふ振り分けが存在したことが記されており、「だし」こそが祭りに情熱を傾ける若衆の拠り所であったことが分かる。

若衆は、町によつて厳しく寸法が定められた左義長本体とは違い、自分たちの自由にできる「だし」を拠り所にして、左義長祭を盛り立てていったのである。その結果、「だし」は、単なる「額」ではない祭りの焦点となり、それ単独で展覧されるなど左義長に従属しつつも独立性を持つ要素になったのである（『八幡町史』によれば、昭和一五年には既に展覧が行われていた）。

## c 儀礼要素

この祭りの最も基本的な儀礼要素は、既に見たように、「安永年中左義長記」に見られる左義長を作つて神社境内まで運び、順番に奉火するという形である。だが、人々の関心は、それに付随する儀礼要素にこそ向けられてきた。

たとえば、明治六（一八七三）年の「左義長祭礼再興願書」（『近江八幡の火祭り行事』所収）は、左義長祭の再興に当たつて、「旧習ノ悪弊ヲ一洗シ、無用之費用相除キ、時勢ヲ汲量シ左義長ヲ永世不朽之祭礼」とすると記している。このように一掃すべきとされた「旧習ノ悪弊」だが、明治一四（一八八一）年の「左義長条約証」にも、「従前之弊習ヲ一洗シ」という文言が見え、しっかりと祭りに定着していたことが分かる。

「悪弊」「弊習」の内容について、「左義長条約証」は、「弊習ヲ一洗シ、一層改良ヲ需成上申致候ニ付而ハ、各戸家根瓦或ハ格子壁等ヲ破毀セサル様注意スヘキハ勿論、左義長行合ノ節ハ互ニ礼節親睦ヲ主トシ、我威押柄之挙動等決テ致間敷、且奉火順次之儀者抽籤ヲ以相定メタル義ニ候得ハ、決シテ前後錯雑等無之者勿論ニ候」と記している。この記載から、左義長を担ぎ回す際に激しく動いて沿道の家屋を破損したり、街路で出会った時にぶつけ合ったり、順番を守らず我先に奉火することが、「弊習」の内容であったことが

分かる。

このうち、奉火の順番を乱すことは、現在は見られないものの、「安永年中左義長記」にもみえる古くからの行為である。一方、左義長のぶつかり合いは、現在も祭りの見せ場としてテレビ中継されるほどに盛んに行われているが、「左義長条約証」が初見で後出的な要素である可能性はある。だが、どちらも、他町に対して対抗心を燃やす場面であることは共通している。つまり、それは祭りの基本要素にとっては付随的で良からぬ行為であったとしても、参加各町にとっては威信のかかる重要要素なのであった。だからこそ、見せ場として存続したのである。

同様に、祭りの見所となっているものに、左義長を担ぎ回る際の若者の女装（異装）と、奉火の際の踊り込みがある。このうち踊り込みは、昭和一〇（一九三五）年頃までは若者たちによる宮入後の神社拝殿への踊り込みであり、その後も昭和三〇年代後半までは境内の仮設舞台への踊り込みという形であった。遊廓や町の有力者宅への土足での踊り込みも、かつてはあったという（『八幡町史』、『火まつり調査報告書』）。それと比べると、現在は女装（異装）も踊り込みも次第に薄れてきているが、それらは何れも若衆たちの日常を凌駕するエネルギーの発露として、祭りに欠かせない位置を占めているだけでなく、後述するように、祭り起源説にも深く関わる要素となっているのである。

### 三 祭り要素と意味付け

#### a 祭りの起源説

次に、八幡町の人々の意識が、祭りの場でどのような形で表出しているのか見てみたい。

それは、文字化された説明と口頭での説明から得られる。このうち文字化

された説明は、日牟禮八幡宮社務所で配布されている「左義長祭の由来」と題された解説で、そこには祭りの起源と「意味」が最もまとまった形で説かれている。その内容は、神社の公式ホームページ上の左義長祭の解説にもほぼ同文で見られ、祭り参加者の口からも同様の話を聞くことができる。

「左義長祭の由来」は、次のように記す。

安土時代の安土に起源し、信長記に織田信長安土において、毎年正月盛大に左義長を行い、自ら南蛮笠を被り紅絹にて顔を包み、錦袍を着け異粧華美な姿で躍り出たとあり、左義長が奇祭といわれる由縁が窺われます。信長が滅び豊臣秀次が八幡城を築きその楽土楽市に招かれて安土より移住した人達を中心として天正十八年（一五八六）に八幡に城下が開町されたが、同時に、四月に行われている氏神、日牟礼八幡宮例祭「八幡まつり」の荘厳さに驚き、これに対抗し、開町による新進気鋭の悦びと感謝の意を籠めて、厄除火防の由緒ある御神徳を仰ぎ、左義長を八幡宮に奉納したようであります。

ここには、二種類の起源説が語られている。一つは、左義長祭の淵源を織田信長の安土に求める説であり、もう一つは毎年四月に行われている「八幡まつり」への対抗意識に起源を求める説である。この二つのうち、前者は祭り参加者の間でも流布しているが、後者の説を現地で聞くことはできない。但し、歴史的には、後者の説が前者に先行して存在していた。

後者の説に登場する「八幡まつり」は、毎年四月一四日から一六日に行なわれる祭りで、左義長祭同様に松明を神社境内の馬場で燃やす火祭りとして知られている。そのため、左義長祭と「八幡まつり」を合わせて「近江八幡の火まつり」と呼び、祭りポスターも二つの祭り合同で製作されている。だが、歴史的には、左義長祭が神社の祭りではなかったのに対して、「八幡まつり」は古来八幡宮の氏子である「十三郷（現在は十二郷）」によって行われてきた神社祭礼であるという違いがある。この二つの祭りの担い手である八幡町と十三郷の間の対抗関係が、後者の起源説の背景にある。

それが初めて見られるのは、既出の明治六年の「左義長祭再興願書」である。例年四月ノ祭礼十三郷ヨリ勤之、市中ニ関係無之故ヲ以氏神并祭礼等無之姿ニ見做シ、人心無本意コトニ存シ来リ、且十三郷ニ於テモ陰ニ其意味ヲ含ミ傲然不憚体モ有之趣哉ニ被相察候、右ハ互ニ神慮ニ背キ候儀ナカラ従前不得止事也人情ニ候故左義帳ヲ以祭礼之代リトシ市中繁栄ヲ祈リ并火災ヲ穢候為ニ奉納致来候

ここには、八幡宮に隣接する町でありながら、十三郷の勤める四月の祭礼（「八幡まつり」）から締め出され、氏神も祭礼も持たないことを馬鹿にされてきた八幡町が、その現実を受け止めた上で神社祭礼に代わる行事として左義長祭を行ってきた、と記されている。

ここでは、これが歴史的事実か否かを問うことはしない。重要なのは、この文書は、当時氏子ではなかった八幡町が、氏子化を求めて作成したという点である。すなわち、古くからの氏子である十三郷との対抗関係を強調することは、氏子化を求める八幡町の立場を有利にする話題だったのである。このことは、逆にいうと、八幡町が氏子になり左義長祭が神社祭礼となってしまうと、十三郷との関係から祭りの起源を説く必要性はなくなるといことになる。事実、八幡町が氏子となつて久しい昭和十五年の『八幡町史』には、左義長祭の起源を十三郷への対抗に求める記述は見られず、現在の「左義長祭の由来」でも、「八幡まつり」の荘厳さへの対抗という言い方に留まつている。

それに代わって登場したのが、現在最も流布している祭りの安土起源説である。

この説は、左義長祭に見られる踊り込みや女装（異装）を、『信長公記』に見られる正月一五日の行事と重ね合わせ、左義長祭を織田信長の安土以来受け継がれてきた祭りと語るもので、八幡町が安土からの移転で成立したという歴史的事実によつて補強されている。

だが、この起源説が登場するのは、決して古いことではない。『八幡町史』によれば、弘化四（一八四七）年に西川吉輔なる人物が「左義長肇徴」とい

う書に、「いつの時代より始りけん詳ならず、或記には慶長のころより始まるよし見えたれど寛束なし」（六五四頁）と記しており、少なくとも近世末には、安土以来とか八幡町開町以来という伝承は存在しなかったことが分かる。

とはいえ、八幡町が安土からの移転によりできたということは歴史的事実であり、近世以来、町の歴史認識として共有されていた。例えば、『八幡町史・下巻』（昭和一五年）所収の八幡町共有文書「寛文十二年長谷川久兵衛宛文書」には、「八幡町者安土町より引移申候故、従信長公安土町へ被下候御朱印ヲ持来候」とあり、元禄一二年四月の金丸又右衛門宛て文書にも「八幡上下町ハ秀次公当御山ニ御在城之節、安土を引移被為遊御黒印被下置、八幡山下町と申候」とみえる。だが、それらは祭り関係の認識ではなかった。それは、八幡町の経済的特権を示す「御朱印」や「御黒印」所持の正当性を示す説明なのであった。それが祭り起源として語られた最初は、『八幡町史』である。そこには、執筆者である福尾猛市郎氏の見解として、次のように記されている。

思ふに八幡の左義長の盛大なる因由は安土時代の安土から起原してゐる。即ち信長記其他諸記録を見るに、織田信長がその晩年に安土に於て毎年盛大なる左義長を行ひ、自ら南蛮笠を被り、紅絹を以て顔を包み、錦袍を着け、諸士を二班に分ち馬を駆り、異粧華美城下庶民これを縦覧した事を記してゐるから、その盛大振りを察すべきであり、安土時代のものがそのまゝ今日に残されてゐるのを知る。安土に左義長を見、かつ行つた町民が八幡に移されて、同様の事を八幡神社を中心に行ふに至る、蓋し故ありといふべきである。（六五四頁）

ここには、明確に『信長公記』に記された正月一五日の行事が左義長祭の起源であると指摘されており、左義長祭の安土起源説は、この本が契機となつて受容されたものと考えられる。

そして、この起源説をベースに、祭りの場では、若者たちの女装について次のように説かれる。

女装して左義長を担ぐのは、織田信長が安土で祭りを始めた時、自分も

ぜひ祭りに参加して楽しみたいと思ったが、自分が参加すると町民たちが存分に楽しめなくなってしまうと考え、参加者が皆、自分が何者か分からないように女装して祭りを行うことにしたのが始まり。

左義長祭は、安土起源説によって、安土からの移転で成立したという八幡町の歴史を呼び覚ますとともに、織田信長以来の伝統を保持している町であるという歴史的アイデンティティを確認する場となったのである。

## b 祭りの「意味」を担うモノ

個別要素で祭りの「意味」を担っているのは、赤紙と「だし」である。

祭りの「意味」として意識されているのは、既に見た厄除・火防であるが、「左義長祭の由来」には「厄除火防 近江商人守護 左義長祭」とも記されており、この祭りには、近江商人の守護という「意味」もあることが分かる。

### 「厄除・火防と赤紙」

このうち、厄除・火防の役割を担っているのは、赤紙である。

赤紙は、左義長本体（胴）の上部に取り付けられて、特異な形態を見せる左義長の一部をなしているが、左義長から切り離されて単独でも用いられている。左義長祭の期間中、家々の軒先には赤紙が飾られ、左義長の奉火の際には、集められた赤紙が左義長とともに焼かれるのだが、これは赤紙に各家に降りかかる災厄を着けて焼き払うのだと理解されている。ちなみに、火防は、「為心町左義長入用帳」の明治三（一八七〇）年の記事に初めて見ることができ、この年に失火があつたことから、火災が祓われるべき災厄の一つに挙げられたのだろう。

ところで、昭和四一年の『火まつり調査報告書』には、左義長本体が厄除けの「意味」を担っていたとする伝承が記されている。それによれば、左義長は昔この地に現われて人々に災いをもたらした魔物の姿をかたどつたもの

で、左義長祭は魔物を退治して焼いたことにちなむ祭りであるという（八頁）。だが、このような意味付けはこの報告書以外に見ることができず、現在の祭りの中でも語られることはない。左義長本体が人の姿であると認識されていることは、この伝承とのつながりを窺わせて興味深く、かつてそれが厄除・火防という「意味」の担い手であつた可能性は否定しきれない。ただ、現在知りうる限りでは、左義長本体は特に「意味」を担っていない。

### 「だし」の多様な意味性

一方、「だし」は、参加各地区の威信を担うとともに、複数の「意味」を担っている。それは、「五穀豊穡の祈り」と「神へのお供え」、そして「近江商人の心意気」、そして世の中の幸福への祈りである。

このうち、「五穀豊穡の祈り」と「神へのお供え」は、干支にちなむ題材を食物で作るという「だし」の特徴から来ている。ただ、この「意味」は、人により認識が異なるうえ、どちらの認識も持っていない人もおり、祭り当事者に広く共有されているとは言えない。これは、「だし」を食物のみで作るという歴史的に新しい状況への説明としての意味合いが強いことによるものと考えられる。

それに対して、「近江商人の心意気」という意味付けは、素材を求めて外国にまで調達に出掛けるなど時間と労力と費用をかけて作つた「だし」を、惜しげもなく奉火で燃やしてしまうことを誇るもので、人々が好んで口にする「意味」となっている。それは、人々が自らの威信を賭ける対象として発展してきた「だし」の歴史的 성격に、関係していると考えられる。「左義長祭の由来」に記された「近江商人守護」という「意味」は聞かれないが、祭りの中で八幡町の歴史を強く意識してきた人々が、自らの歴史的属性（近江商人）を誇る対象としては、「だし」こそ最も相応しいものだったことは容易に理解できる。

だが、「だし」には、八幡町民という枠を超えた世の中に向け幸福を祈る思いも込められている。それは、「だし」の図柄に表現されており、そこに

込められたメッセージは、祭りに際して配布されるチラシの「左義長だしの説明」に見ることができる。<sup>⑩</sup>

「だし」は、八幡町の歴史的アイデンティティに関わる社会的な「意味」を担うとともに、幸福祈願という新たな宗教的「意味」をも担い始めているのである。

## まとめ

ここまで、日牟禮八幡宮の左義長祭を事例に、その歴史的展開を視野に入れつつ、祭り要素と祭りに参加する人々の意味付けの関係をみてきた。

祭りを成り立たせる要素にはモノと儀礼の二種類があり、それらはそれぞれ、祭りに不可欠な中心的要素とそれに伴う従属的要素とに分かれる。左義長祭における中心的要素は、モノでは左義長本体であり、儀礼では左義長を神社境内に運んで奉火することが該当する。従属的な要素は、モノでは左義長に飾られる吉祥物と赤紙と「だし」であり、儀礼では左義長を担ぎ回るとに付随する女装や踊り込み、左義長のケンカが該当する。

そして、これらの要素は、更に二種類に分けることができる。それは、歴史を通して一貫した持続的な要素と、歴史の中で展開した要素である。これを仮に固定的な要素と可変的要素と名付けると、固定的であるのは、形態に殆ど変化が生じていないと考えられる左義長本体と吉祥物、赤紙、それに左義長を神社境内に運んで奉火する儀礼となる。一方、その形態に変化が認められる「だし」や、歴史的に消長が見られる左義長のケンカや踊り込み、女装（異装）は、可変的な要素として把握することができる。

このような分類に、現在見聞し得る意味付けを組み合わせると、次のようになる。

「モノ」

中心的・固定的「左義長本体」：（人の姿）

従属的・固定的「吉祥物、赤紙」：招福「吉祥物」、厄除・火防「赤紙」

従属的・可変的「だし」：各町の威信、近江商人の心意気、一年間の幸福祈願、五穀豊穰、神へのお供え

「儀礼行為」

中心的・固定的「左義長の移動、奉火」：厄除・火防

従属的・可変的「左義長のケンカ、踊り込み、女装」：各町の威信、安土との連続性の意識

ただ、左義長の移動と奉火は、祭りの根幹をなす要素であり中心的儀礼要素と把握し得るが、左義長というモノ抜きには成り立たないことを考えれば、左義長本体に対しては従属的な位置にあると言える。

このように考えると、祭りの「意味」は左義長本体に対して従属する要素によつて担われており、その「意味」のうち宗教的なものは固定的な要素、社会的なものとは可変的な要素によつて担われていることが明らかとなる。普遍的な宗教的な「意味」は固定的な要素に託し、八幡町および自己の属性に関する「意味」を可変的要素に見出すという、人々の意識の傾向性が、ここに表れている。その中で「だし」は例外的で、両者の「意味」を同時に担い始めている。これは、「だし」が次第に祭りの中心的要素化した結果、大きな変化が起きにくくなり、図柄こそ変化しながらもモノとしては半ば固定化した結果かとも考えられる。

それと対照的なのが、最も中心的な要素でありながら、「意味」を担わない左義長である。左義長は、各部分に決まった名称があり、人の姿に作ると言われ、必ず御幣が取り付けられるなど、他の要素と比べて非日常性を強く帯びている。それにも関わらず「意味」が語られない。それは、祭りの中心的存在として強い非日常性を帯びていること自体に、意味があるからではないだろうか。非日常性を強く帯びながらも「意味」を担わないことで、左義長は従属的な要素が担う様々な「意味」を一つにつなぎとめているのではな

いか、ということである。それは、左義長の構造や寸法が統一されることで、八幡町の統合性が保たれることとも通じ合う。特定の意思（「意味」）を担わないことで、複数の「意味」をつなぎとめて祭りが成り立つのである。

左義長祭に見られるモノと心の関係性は、以上の通りである。本稿で明らかにしたのは、関係性の一つのパターンに過ぎない。この研究を深めるためには、「意味」の生成過程などさらに詳細な検討が必要であるし、他の事例との比較も今後必要とされる。

## 註

① 祭りの「意味」をめぐる議論については、拙稿「祭りにおける「形」と「意味」——諏訪大社御柱祭にみる「意味」の拒絶——」（『國學院雑誌』一〇四—一一、二〇〇三年）に、簡単にまとめた。

② 植木行宣『山・鉾・屋台の祭り——風流の開花』（白水社、二〇〇一年）に、その主要な研究が収められている。また、福原敏男氏の『祭礼文化史の研究』（法政大学出版局、一九九五年）なども、同様の観点による成果といえる。

③ 当事者の意味付けを研究対象とする点で、このような視点は、近年盛んな「創られた伝統」を明らかにする研究と似ている面がある。だが、「創られた伝統」を明らかにする研究が現にある意味付けを否定するところから始まるのに対して、本稿の視点は、現にある意味付けを重視する点で大きく異なる。現実になされている意味付けを通して、祭りと地域の人々との関係を明らかにするという観点からの先駆的にして傑出した研究に、茂木栄氏の遠山祭りの分析「祭伝承と結集の源流」（『祭伝承の持続と変化』『日本民俗学』一二五、昭和五二年をもとにして『祭り伝承論』大明堂、一九九三年）がある。

④ 文化一二〇三（一八一五—一六）年頃の福山左義長祭の様子を記した「備後国福山領風俗問状答」（『近江八幡の火祭り行事』二一—二三頁に所収）にも、左義長は燃やす物であるから造り物に人の形を作つてはいけなさとあり、左義長の造り物に共通の観念があった可能性が考えられる。

⑤ 例えば、「休年」だった嘉永三年の記事には、次のようにある。

当年者休年二有之処、若衆組頭一同へ段々之相頼二付、例二者不相成候趣急度取極左儀帳出来額若衆持二而、左儀長分町内持二いたし、惣而先例二不拘十四

日・十五日（中略）人足等も不申附、最寄二罷出奉納当日順番なし二当番町より先へ止、八ツ時目出度奉納相済候也

また、諸物価高騰で規模縮小予定だった慶応三年には、次のように記される。

当春諒閣御停止二付左義長延月二相成、四月五日六日両日二奉納被仰出候事、去寅秋以来諸色高直之上米穀格別之発騰世間一同六ヶ敷、今年二到而も不相変（中略）折柄二付左義長諸事極々省略二而奉納致ス、出シも止メ之相談二取極置候処、他町二而も仮初之額出来候町内も在之趣二而四日夕方二いたり若衆より俄二願出られ、無抛アツラへ之出シ出来

⑥ 近世末期に、若者たちが縁日や祭りに事寄せて町を動かして「遊び日」を増やしたことが知られている（古川貞雄『村の遊び日』平凡社選書、昭和六一年）。左義長祭の場合、「遊び日」を増やすのとは異なるが、祭りを通して自らの存在を誇示して町を動かすという点で、「遊び日」を求めた若者たち同様の行動といえる。このような認識がいつからあるのかは不明だが、少なくとも昭和一五年の『八幡町史』には明記されている。だが、現地で左義長作りの場にいた数人に尋ねた中でも、左義長の形を人の姿と認識して、ここに挙げた名称を知っている人がいる一方、そのような認識や知識を全く持たない人もいた。伝統的な認識が、消え去りつつあるのかも知れない。

⑦ 「だし」は、各地の近世都市的祭礼に見られるねり物の造り物の一種と考えられるが、左義長と組み合わせられた例としては、他に広島県の福山と福井県勝山の事例がある。福山左義長祭に関しては、『近江八幡の火祭り行事』二一—二三頁に紹介されているほか、福原敏男「福山の左義長」とんど音頭」（植木行宣・田井竜一編『都市の祭礼——山・鉾・屋台と囃子』岩田書院、平成一七年に所収）に詳しい。勝山左義長祭については、『勝山市史』二一（昭和四九年）を参照。

⑧ 福井県勝山の左義長祭では、干支などに因む造り物が町内の家などで飾られるという（『勝山市史』二二）。勝山の左義長祭の歴史的経緯は不明だが、左義長祭の造り物が左義長本体とは独立して扱われるケースとして、興味深い。

⑨ たとえば、「平成二十年左義長だし説明」に記載された第一区の「だし」は、「絆富明末御殿引手」を命題にして「金時豆、ローズヒップ（紅茶）、するめ、友志良賀（麻）他」を材料に作られたもので、その意図は、「鼠は子孫繁栄の象徴ですが、現代では、子孫繁栄より失われつつある親子の絆が大切だと思い、絆をテーマにしました。また、白鼠は十二支の中で蛇をも上回る富をもたらす神の使い、台の奥の引手も財力の象徴とされています。引手の五三桐の紋は秀吉の紋で、特に秀吉は引手に拘り、また、信長から「猿」以外に「はげ鼠」と呼ばれていた説もあり、五三桐御殿引手を製作し、明るい未来への扉（襖）の手掛りになる様願ひ奉納いたします。」と説明されている。